

放課後児童クラブ・児童館における 子どもの「遊び」の状況と支援課題

Status of children's "play" and support issues at after-school children's clubs
and children's centers

西村 美佳

Mika NISHIMURA

中村 強士

Tsuyoshi NAKAMURA

Abstract

This research examines the actual human and physical environment of play in children's centers and clubs, where children spend their time after school, and the play situation of what kind of play children engage in. The purpose of this study was to explore issues related to "enriching play" for children after school based on self-assessments and awareness of "support for play" by support workers. A survey was conducted among child support workers. As a result, "play equipment play," "jumping rope," "dodgeball," "tag," and "soccer" are often played as "outdoor play" at children's centers and clubs. In addition, "indoor play" includes "reading/picture book aloud," "playing with dolls/stuffed animals," "craft/handicrafts/origami," "drawing," "talking," "card games," "board games," "Blocks and LaQ," "word games," "puzzles," "shogi," "paper airplanes," "pretend play," and "cradles" were the most popular. Regarding the involvement of support staff, many of them said, "They play together in group play," and more than half of the support staff said, "I stay close to the children and help them play together in a fun and safe manner as playmates and companions." It shows that "we are supporting the On the other hand, there are fewer respondents who answered "I am able to do it" for the following three items: "Introducing play activities that children are unfamiliar with," "Teaching them the skills and knowledge necessary for play," and "Leading the play while playing together." This was the result.

Key words : 児童期の遊び, 遊びの支援, 放課後児童支援員, 児童館, 児童クラブ

1. はじめに

「放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準」(平成26年厚生労働省令第63号)に基づき、放課後児童支援員(以下、支援員)の新たな資格認定制度が誕生し、すでに10年近くが経過しようとしている。放課後児童支援員の専門性は多岐に及ぶが、その中で特に重要な専門性として「子どもの生活・遊びと育ちの保障」が挙げられる。すなわち、放課後児童支援員は、放課後の子どもの生活において、遊びを通した子どもの育ちの保障ができる専門的な知識やスキルを持ち、そのスキルアップを継続していくことが求められる。また、それは放課後児童クラブや児童館における保育内容の充実と質の向上に直接的かつ密接に関わっていく重要な視点である。このような問題意識に立ち、本研究では、放課後の子どもたちの居場所である児童館・児童クラブにおける遊びの人的環境・物的環境の実態、子どもたちがどのような遊びを遊んでいるのかという遊びの内容、そして支援員による遊びの支援に関する自己評価や気づきから、放課後の子どもたちの「遊び」の充実に向けた課題を探ることを目的とし、調査を行った。

本調査は、A県K市の児童館・児童クラブに勤務する支援員を対象に行った。

○K市の概況(2022年度)

- ・市内公立小学校数：10
- ・児童クラブ設置数：10(支援の単位数23)
- ・児童館設置数：10
- ・児童クラブ未設置学区数：0
- ・運営主体：児童クラブ・児童館ともに、すべてNPO法人
- ・開設場所：児童クラブは支援の単位数23のうち21は学校施設、2は公立保育所内。児童館は各小学校区に1つ設置された児童館専用施設で開設。

○調査日：2022年11月20日

○調査方法：K市の児童館・児童クラブに勤務する支援員が参加する研修会(テーマは「遊びの理解と支援」、参加者総数72名)の終了時に、調査用紙を配布し、その場で回答を依頼し、回収した。

○調査用紙配布数：72、全回収数：71(回答率99%)

2. 調査結果

(1) 回答者の属性

まず、本調査の回答者の基本調査として、年代、性別、勤務先、職歴、勤務年数、保持資格・免許について回答を求めた。まず年代は図1の結果となった。20代以下から60代以上まで幅広い年代が放課後の子どもの遊びや生活の支援に関わっていることがわかる。中でも最多は50代(28%)、次いで20代以下の若年の支援員(27%)、そして30代(18%)と続いている。また、回答者の性別としては、図2のとおり、女性の支援員が77%、男性が23%と、女性の支援員の割合が3倍程度多い結果となった。児童期の子どもは、幼児期以上に活動的な遊びを行うようになる時期であり、男女による遊び方の違いも幼児期より顕在化する。支援員の性差や男女の割合が、遊びの種類や内容、遊び方に影響をもたらす可能性がある。

回答者の現在の勤務先としては図3のとおり、児童クラブ勤務が42%と最も高い割合を占め、次いで児童館勤務が41%、中には児童館と児童クラブを兼務しているという回答も9%認められたが、放課後の保育を必要とする児童が通う児童クラブと、自由に遊びに来る場所としての児童館では、来館する子どもに必要となる支援や保育内容も異なることを鑑みると、本来、兼務はなるべく避けたい雇用形態である。

児童館や児童クラブの支援員は、大学や専門学校などを卒業してすぐに働き始める新卒者もいるが、他職種で勤務したのちに、支援員となる場合も多い。図4に示されるように、児童館・児童クラブに勤務する以前の職歴が「ある」支援員は63%、「ない」と回答した支援員は37%であり、支援員に就く以前の職歴のある支援員の方が多い結果となった。また、支援員以前の職歴として、どのような職業に就いていたのかを示したのが図5

である。他の施設で児童厚生員や児童クラブ指導員をしていた者が28%、保育士が19%、そして最多は「その他」の53%となっている。その他の職種としては、事務員・会社員（5人）、幼稚園教諭（2人）、役場など地方公務員（2人）、英会話講師、介護福祉士、子育て支援員、合唱団の伴奏、保育園の用務員、大学の研究室、接客業、飲食業、製造業、ペットショップ店員、Web関係の職種等、多岐に及ぶ回答があった。

図1. 回答者の年代

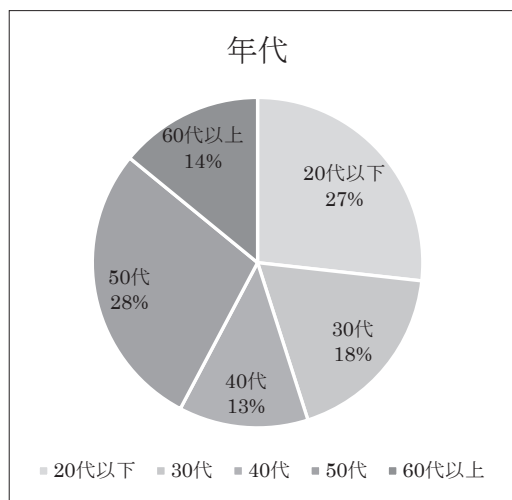


図2. 回答者の性別

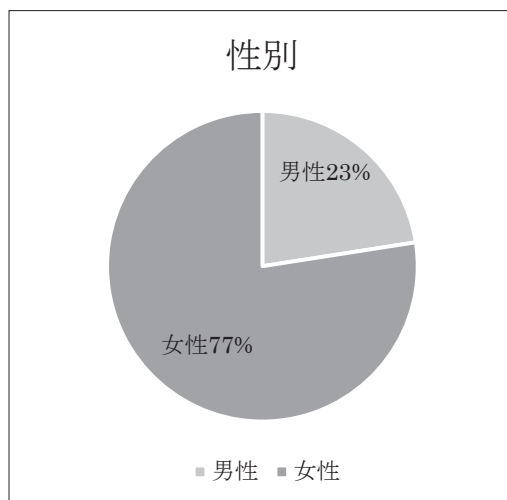


図3. 現在の勤務先

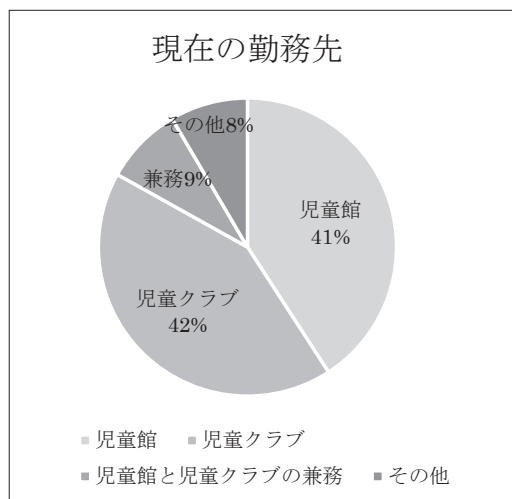
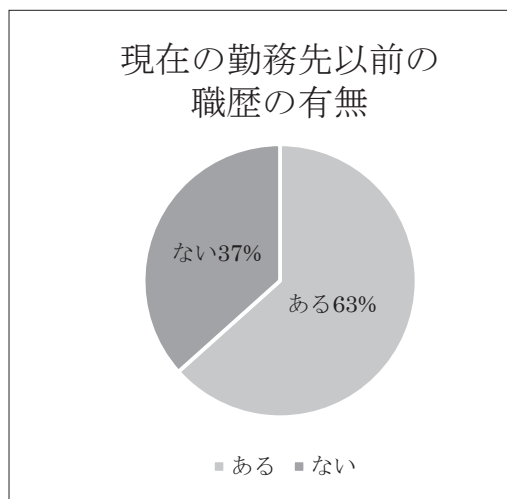


図4. 現在の勤務先以前の職歴



一方、回答者に児童館・児童クラブでの通算勤務年数を問う質問では、図6の結果となった。最多は「5年～10年未満」と「10年以上」が同率24%であった。すなわち、本調査の回答者は、中堅からベテランの支援員の割合が高いことを示す。次いで、「1年～3年未満」、「3年～5年未満」の回答者が各18%となった。

また、回答者が「子どもや人に関わる資

格・免許」をどの程度保持しているかについて回答を求めたところ、図7の結果となった。最多となったのは「放課後児童支援員」(35名)、「児童厚生員」(34名)、「保育士」(22名)、「教員免許」(11名)の順に多い結果となった。「放課後児童支援員」や「児童厚生員」といった放課後支援に直接かかわる資格以外に、「保育士」資格の保持者の割合が高い結果となった。

図5. 現在の勤務先以前の職歴

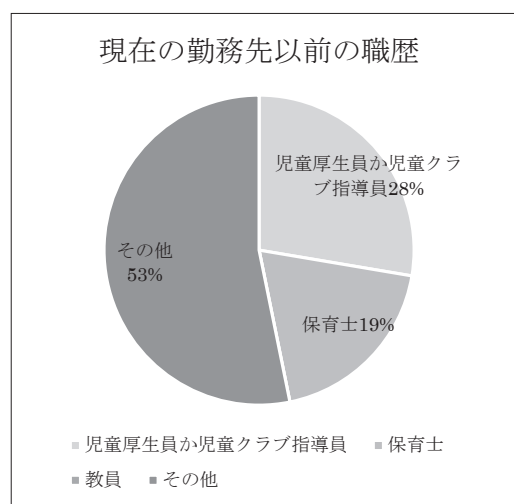


図6. 児童館及び児童クラブの通算勤務年数

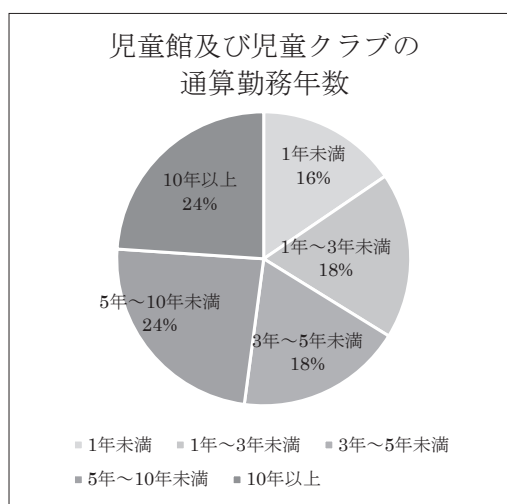
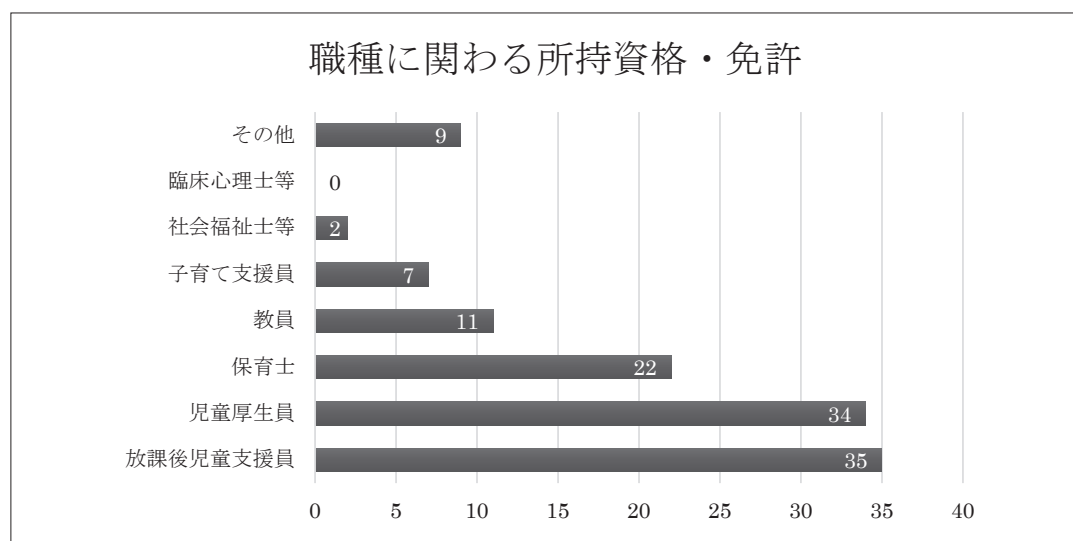


図7. 職種に関わる保持資格・免許



(2) 児童館・児童クラブの設備環境

次に、児童館・児童クラブにおいて、子どもが生活や遊びの際に使用できる設備については、児童館は図8、児童クラブは図9の結果となった。まず、児童館では、子どもが遊んだり生活したりする場所として、「図書室」、「遊戯室」、「館庭」、さらに「事務室」、

「集会室」が「専有している施設」となっている割合が高い結果となった。一方、児童クラブでは、「クラブ室」と「校庭」が利用可能な設備として多い結果となり、次いで「体育館」も利用可能な設備として挙げられている。児童クラブの「クラブ室」は、「共有設備」ではなく、「専有設備」であるはずなので、

図8. 児童館における専有設備

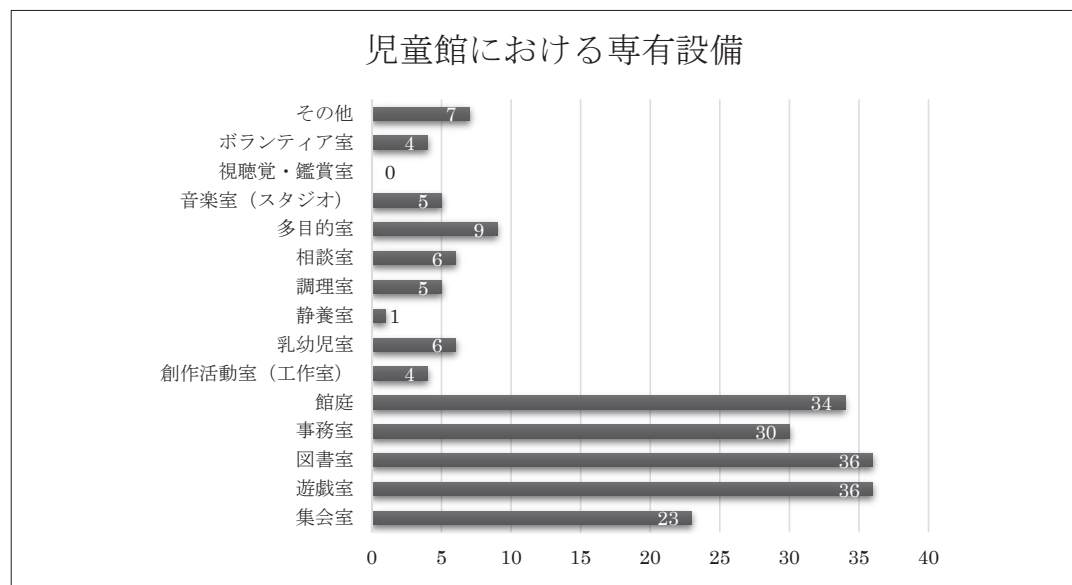
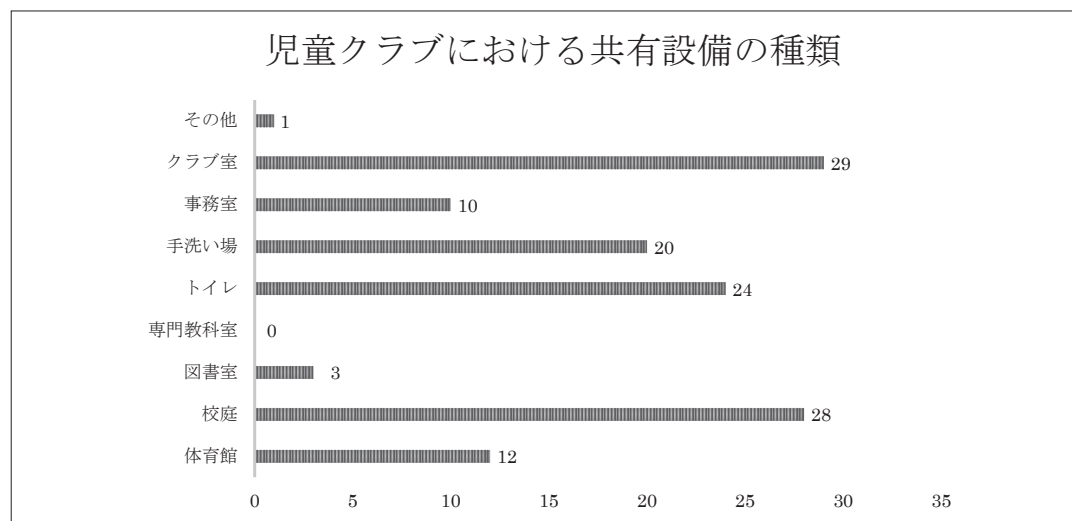


図9. 児童クラブにおける共有設備の種類



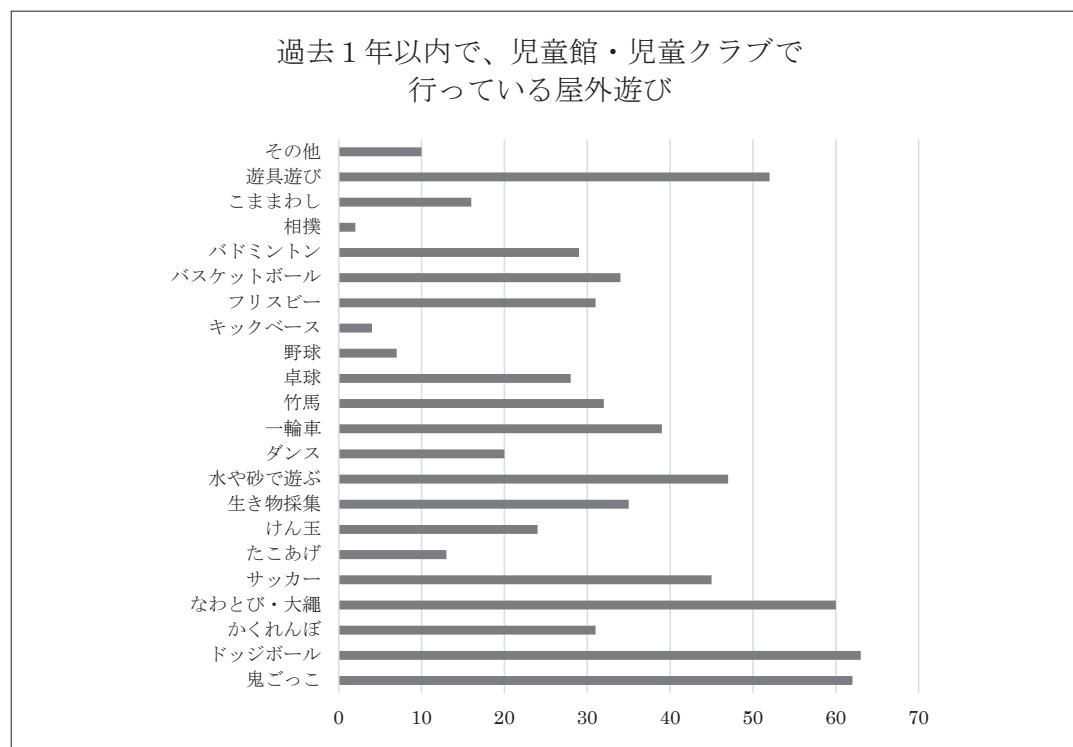
回答者が「使用できる施設」として回答した可能性が高いと考える。また、「図書室」が利用可能という回答は5名以下となっている。使用が可能な設備は、放課後の過ごし方の多様性や、遊びの広がり大いに影響する。児童館・児童クラブともに、館庭や校庭を利用できることが多いという点では、全身を動かす運動遊びが行いやすい環境にあると言えるが、児童クラブにおいて校庭や体育館が兼用ということは、学校の部活動やクラブ活動が優先されるということでもある。その意味で児童クラブの遊びが物理環境的に制限されていると言える。さらに、雨天時に遊ぶ場所はクラブ室しかないという状況にもなっている。せめて、学校内設置の児童クラブであれば、「学校内」であるからこそその利点を活かし、静かに読書に没頭できる「図書室」の共用もさらに進めるべきではないだろ

うか。

(3) 児童館・児童クラブの遊びの実態

過去1年間で児童館・児童クラブにて行われている遊びについて、「屋外遊び」と「室内遊び」に分けて問うた。屋外遊びについての回答は図10の通りである。「屋外遊び」では、「遊具遊び」、「なわとび・大縄」、「ドッジボール」、「鬼ごっこ」がほぼ同率で多い結果となった。次いで多いのが「サッカー」となっている。小学生にとって、放課の時間などになじんでいる遊びがよく行われていると言える。館庭や校庭という屋外の広場が使用できる児童館・児童クラブの設備状況にも合致しているといえる。また「水や砂で遊ぶ」、「一輪車」、「生き物採集」、「バスケットボール」、「フリスビー」、「竹馬」、「かくれんぼ」なども、「サッカー」よりは少ないものの、

図10. 過去1年以内で児童館・児童クラブで行っている屋外遊び



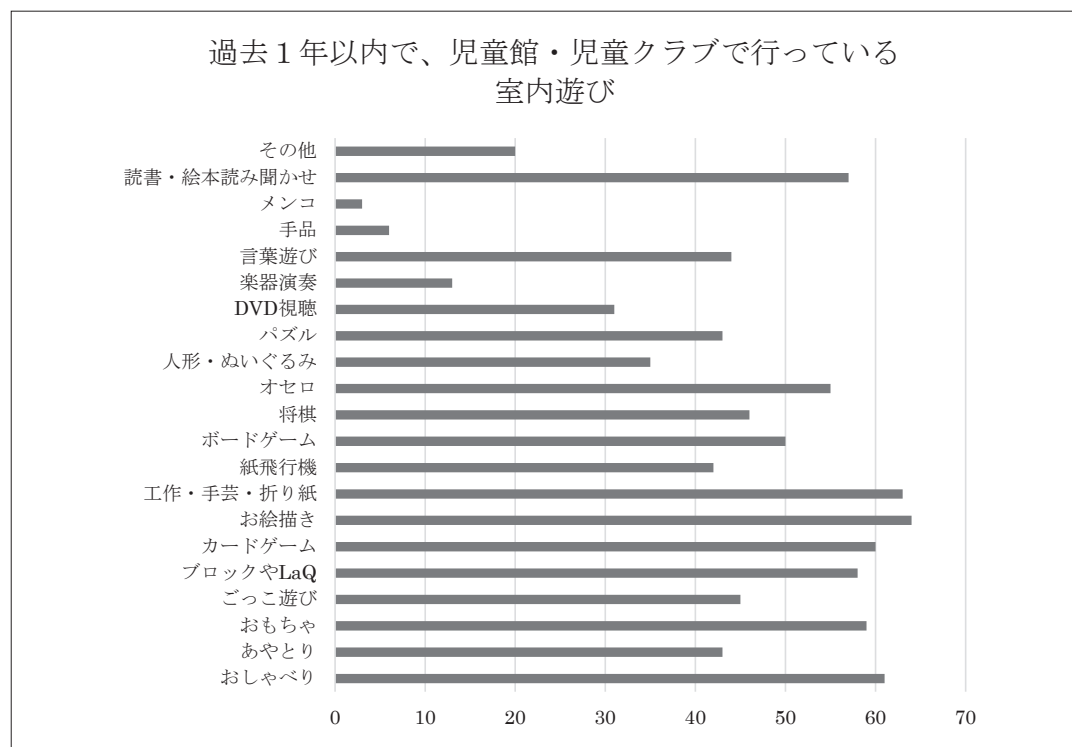
30名以上の支援員が「過去1年間で遊んだ」と回答した遊びとなった。一方、「相撲」、「キックベース」、「野球」、「たこあげ」など、体同士をぶつけ合う遊びや、かなり広い屋外の場所が確保できなければ行にくい遊びはほとんど行われていない結果となった。

次に、「室内遊び」については図11の結果となった。「屋外遊び」と比較すると、室内では各児童館・児童クラブともに、多様な遊びが行われていることがわかる。特に「読書・絵本の読み聞かせ」、「人形・ぬいぐるみ遊び」、「工作・手芸・折り紙」、「お絵描き」、「おしゃべり」、「カードゲーム」、「ボードゲーム」、「ブロックやラQ」については、50名以上が「行っている遊び」として回答している。これに次いで多い遊びの群に、しりとりやなぞなぞなどの「言葉遊び」、「パズル」、「将棋」、「紙飛行機」、「ごっこ遊び」、「あやとり」

が挙げられている。限られた使用可能な設備・施設において、天候に左右されずにできる遊びの幅が広く設定されることにより、個々の子どもが「やりたい遊び」ができるような遊びの工夫がされていることを示していると言えるだろう。

以上のように、児童館・児童クラブで行われている屋外遊び、室内遊びを見ると、例えばドッジボール・中当て、木登り、公園遊具、なわとび、ゴムとび、多種多様な鬼ごっこ、こままわし、外で自然物を使った遊び・虫取り・生き物取り、お絵かき、折り紙など手先を使う遊びなど、1970年代に盛んに行われていたとされる遊びが、現代も行われていることがわかる。児童館や児童クラブでは、現代の小学生の放課後の遊びにおいて、主流となっているゲーム機やタブレット、さらにスマートフォンなど、デジタルデバイスを通じ

図11. 過去1年以内で児童館・児童クラブで行っている室内遊び



た遊びができない。ある意味、強制的な「デジタルデトックス」ができる放課後の時間が作られる場所としての児童館や児童クラブの存在意義は大きい。そこで展開される遊びを通じて、子どもの育ちにどのような影響をもたらしているのかについて、遊びの具体的な事例のさらなる検討が必要であると考えます。

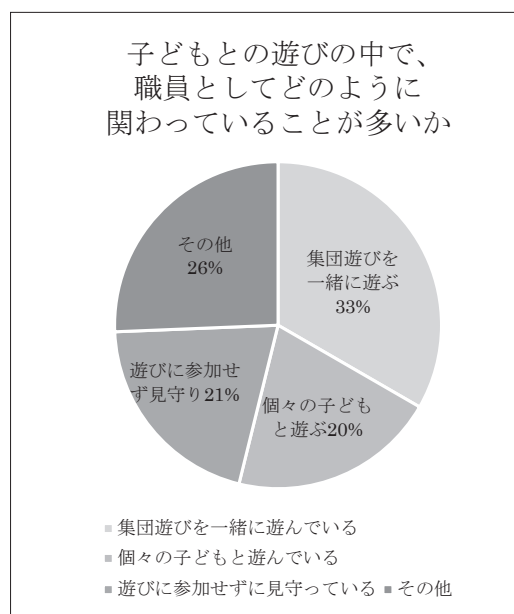
(4) 支援員としての「遊び」への関わりの状況と課題

子どもたちの遊びに、支援員はどのように関わっているのかを示したのが図12である。これについては、「集団遊びを一緒に遊んでいる」(33%)が最も多い結果となった。そのほかには、「遊びに参加せずに見守っている」(21%)、「個々の子どもと遊んでいる」(20%)がほぼ同率の回答となった。放課後児童クラブ運営指針には子どもの遊びや生活への支援員の関わりとして「安全の確保のような間接的なもの」とともに、「大人が自ら遊びを楽しむ姿を見せる」という直接的な関

わりまで、その時に応じて柔軟に対応することが求められているが、遊びには参加せずに見守る支援が主となっている支援員も2割ほどいることがわかる。

一方、子どもの遊びの支援として「特にできている」と支援員が感じていることについて3つまで選択を求めた質問に対する結果は、図13の通りである。「特にできている」回答者が最多(46名)であったのが「遊びのそばにいて、楽しく安全に遊べるようにする」ということであった。次いで多かったのは「遊び仲間の一員になる」(回答数35)、「遊び相手になる」(35名)と同数であった。この結果からは、支援員の半数以上が、「子どものそばにいて、遊び相手や遊び仲間と一緒に遊びながら、楽しく安全に遊べるように支援している」ことを示している。その反面、「子どもの知らない遊びを紹介する」(回答数5)、「遊びに必要な技術や知識を教える」(回答数8)、「一緒に遊びながら遊びをリードする」(回答数8)の3つの項目について「できている」という回答が少ない結果となった。子どもと一緒に遊んでいるけれど、子どもが知らない遊びを紹介して、子どもの遊びがさらに深まったり、遊びの幅が広がる支援についてはできていないと考えている支援員がほとんどであることが明らかになった。また、「子どもたちだけで遊べるようにする」(回答数23)については、児童クラブの支援員が14、児童館の支援員が6、児童館・児童クラブ兼務が3と、児童クラブの支援員の方が「できている」と回答している割合が高い結果となった。児童期の子どもたちが、自分たちでやりたい遊びを自由に遊べるようにしていくことは遊びの支援において重要なポイントの1つであり、その意味では支援員が「遊びの仲間になって、安全に楽しく遊べるように支援する」ことは必要な関わ

図12. 職員としての子どもの遊びの関わり方



りである。それに加えて、子どもの遊びをより豊かにする力量については、今後期待される部分である。

一方、支援員が「遊びを豊かにする」すなわち「遊びを充実させようとする」ときに、「障壁」となる要因は何かについても質問したところ、図14の結果となった。図14に示されているように、遊びを充実させようとするときに立ちはだかる「障壁」は、「安全面・衛生面の配慮と遊びの両立の困難さ」（回答数33）が最多となり、次いで「自分の遊びに

関する知識・スキル不足」（回答数32）も多い結果となった。3番目に多かったのが「施設・設備の不足」（回答数26）である。これら3つの「障壁」からは、「子どもを安全に遊ばせる」ことに加えて、コロナ禍の影響において以前よりも「保健・衛生面の配慮」が求められるようになる中で、遊びの充実との両立が一層困難になっている状況が見取れる。また、それだけではなく、遊びの幅を広げたり、遊び方のバリエーションを提案するなどの、遊びをリードする知識やスキルが不

図13. 子どもの遊びの支援として「特にできている」と思うもの

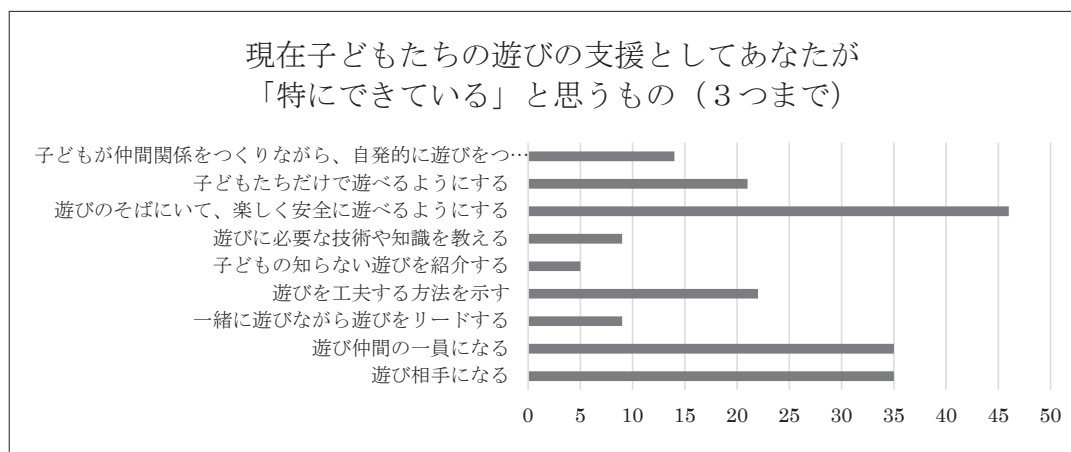
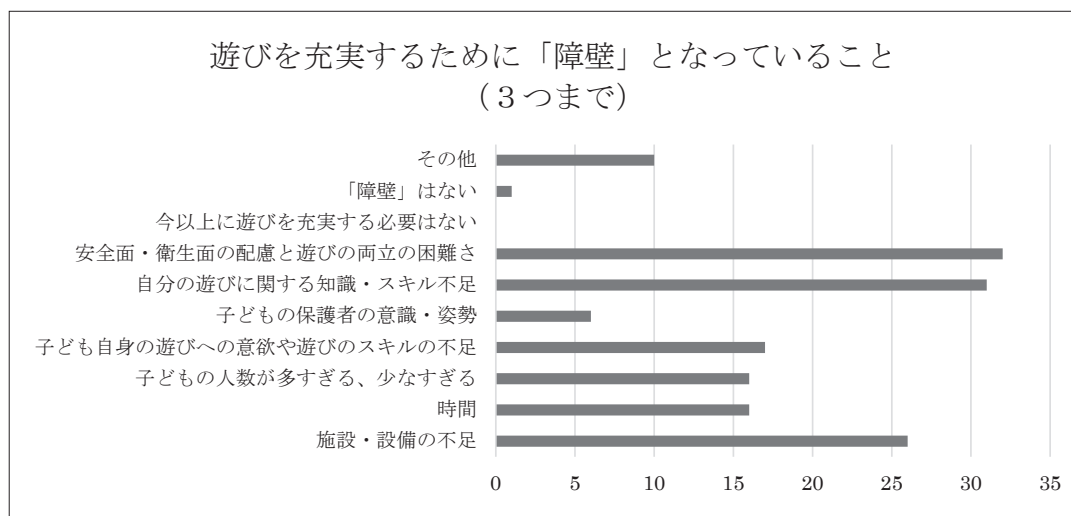


図14. 遊びの充実にとっての「障壁」

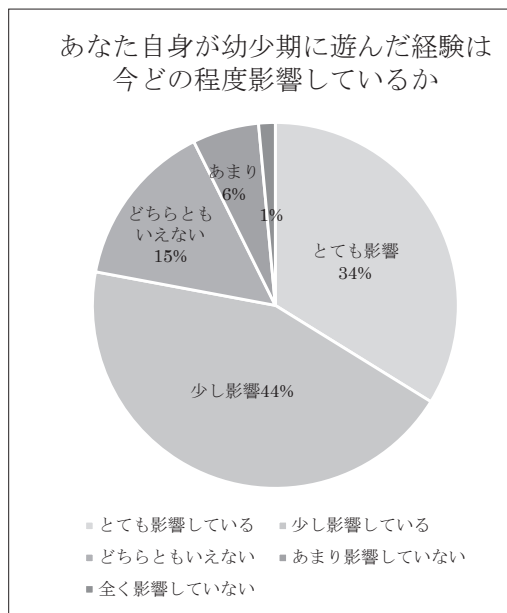


足していることを自覚している支援員も多いことがわかる。そして、色々やってみたい遊びがあったとしても、利用できる施設や環境面の限界から、断念せざるを得ない状況にいる支援員が半数近く存在することも明らかになった。「障壁」について「その他」（回答数10）とされた回答の自由記載欄には、「金銭面からやむなく、おもちゃを増やしたり、子どものリクエストになかなか応えられない」、「子ども同士の思いがぶつかって行動が止まる」、「支援員の不足。特に支援が必要な子についてないといけないことがあり、人が足りないことがある」、「支援員自身の体の不調」、「（行政からの）禁止事項の多さ」、「集団遊びが苦手な子どもが多い」、「職員の意識の差」、「中高生と小学生の弱肉強食の状況」（児童館）などが挙げられている。単に施設・設備の不足のみならず、特別な配慮が必要な子どもが増えている中で、遊びを充実するに足る十分な人員、支援員自身の力量の不足とともに、「禁止事項の多さ」も、「障壁」として挙げる声があった。

また、支援員自身の遊びを充実する力量は、1つには支援員自身の幼少期の「遊び経験」の影響も大きい。そこで、支援員の幼少期の「遊び経験」は、子どもの遊びを支援する際にどれほど影響していると自覚しているのかを尋ねたところ、図15の通り、「とても影響している」（34%）、「少し影響している」（44%）と、「影響している」との回答が8割弱を占める結果となっている。今後も幼少期の遊び経験が乏しい支援員であっても、子どもたちとともに遊び、遊びの「引き出し」を増やしていけるような研修や情報交流の機会の充実が一層必要である。

子どもの遊びが豊かに展開され、放課後の生活が楽しく、心満たされるものになっていくためには、支援員が遊びの仲間になって、

図15. 支援員自身の幼少期の遊び経験による遊びの支援への影響



子どもの遊びを豊かにしていく知識やスキルアップを図ることができる機会を定期的に維持していくとともに、物的な環境・設備の整備、例えば小学校の施設など、速やかに活用可能な既存の施設・設備を児童クラブ等に積極的に提供できるようなシステムの構築も急がれる。

3. まとめにかえて

本調査の最後に、支援員として放課後の子どもの遊びに関して「感じること・思うこと」を自由記載形式で回答してもらったところ、多くの回答が得られた。その中でも近年の子どもたちの遊びに対する様子の変化を実感しているという回答がいくつも見られた。そしてそれらは、支援員にとって「戸惑い」として感じられる子どもの変化であることがわかる。特に、「何もやりたくない」、「遊びたい遊びがない」と言う子どもが増えているという支援員の声はいくつも見ら

れた。具体的には以下のような回答があった。

- ・一緒に遊んでいても何もやりたくないといわれる時がある。(児童館)
- ・「遊ぼう～」と誘われるが、子どもの方に「これがしたい！」ということが少ない。「何か面白いものない?」「先生のオススメは?」と聞かれる。(児童館)
- ・「つまらない」という。なのに「おもしろい」は言わない。(児童館・クラブ兼務)

これまで、「遊びの支援」を考える際に、子どもは「遊びたくて仕方ない存在」であることが前提となってきたのではないだろうか。しかし、その前提そのものも変化してきていることを示唆する意見である。つまり、遊びの支援においては、子どもの主体性の発揮が阻害されないようにするだけではなく、場合によっては、「やりたいこと」、「遊びたいこと」そのものを支援員がともに探し、刺激するような、より能動的な支援が必要になっているということなのかもしれない。その一方で、「何もやりたくない」という子どもをどのように捉えるかについては、その子どもの背景も含めた様々な想像ができる。例えば、幼児期までの子どもにはしばしば、自分は遊ばなくても他児が遊んでいるのを見て楽しんでいることもある。そして、そのような状態も「遊び」と見なし得る。他児が遊んでいるのを「見る」とは、他児あるいは他児が遊んでいることへの関心や興味があるということを示しており、それはその子どもが当事者として遊ぶための第一歩になっていくことも少なくない。また、普段の生活において、様々な事情から心身ともに疲れていて、児童館でただ「休みたい」という子どももいる。子どもが「遊び」で見せる姿から、その子の抱えている背景や内面、また育ちの過程が見

えることは少なくない。「遊んでいる状態」を、その時、その場面だけで表面的に現れる状態だけで捉えるのではなく、時間的経過の中での変化、また支援員や他児との関係性の変化を軸にして、全体として丁寧に捉えていくことが求められるであろう。

また、この他にも、以下のような回答が見られた。

- ・「力」がある子が、低学年や「力」のない子と混ざって遊ぼうとすると、「力」がある子が、自ら気をつけてくれる場合と、気をつけず、自分を主張し、能力に発展する子と分かれ、職員が入ってもトラブルが多く、離れさせようとする、職員と1対1になりがち。(児童館)
- ・「〇〇ができないからやらない」という児童が多いが、できるようにして楽しむためにやってみることが大事だと感じる。うまくその遊びを行ってもらうには、と考えます。その児童自身はその遊びをやりたいと思っています。(児童館)
- ・勝ち負けにこじれる子が多い。泣いたり、参加しない選択をする子もいる。(児童館)
- ・鬼ごっこが長続きしない。仲間外れや、同じ子が鬼になり、自分が鬼になるとやめる。(児童クラブ)
- ・友だち同士で遊べない子どももいる。どのように友達に声をかけたら良いかわからない子どももいる。私の力不足でなかなかフォローできない。(児童クラブ)
- ・集団遊びを望む子は少なくなってきて、学校でも、家でも居場所のない子が(児童館で)自由に過ごしている状況が多く見られます。子どもたちの悩みやストレスを聞いてあげられる場所として充実させていきたいと思っています。(児童館)

・子どもの中でも、人を傷つけない「ウソ」を受け入れる事ができない子が増えたと感じました。例えば「コウノトリが赤ちゃんを連れてくる」、「レンコンの穴はそれ専門の職人がいる」といった優しかったり、楽しいウソについても、「だまされた!」という怒りを示す子も出てきています。「正しい事」、「正しい行い」をされる事に子どもたちも敏感になっているのかなと思いました。(児童館)

以上の回答からは、子どもたちの中にはかつてと比べると、「できる・できない」という評価軸の中で「できる」立場で遊びたいという意識が強くなっている可能性が示唆される。「鬼になりたくない」という子ども、鬼になると鬼ごっこを抜ける子ども、「力」の加減をしようとしないう子ども、友達同士では遊ばずに支援員と遊びたがる子ども、集団遊びではなく少人数で遊ぶ子ども、「楽しいウソ」を遊び心で楽しめずに「正しい事」に固執する子どもなど、かつての子どもの遊びの場面ではあまり見られなかった様子が、しばしば現れており、そのような子どもへの対応に苦慮しながら遊びをどのように支援すればよいのか悩む支援員の姿が浮かび上がる。本来「遊び」を楽しむとは、力の強い子・弱い子、大きい子・小さい子が、共に遊びを楽しむにはどうすればよいか、所与の人的・物的環境を改変し、再構成する過程をも楽しむということであった。また、「そこにあるもの」・「そこにいる人」で遊べるように、遊び方を工夫したり、遊びを選んで決めていくことは、それこそが多様な人とともに生きていくということの練習であったりもする。その一方で、そのような「大人目線の目的」が「遊び」に先立って設定されてしまえば、遊びは遊びでなくなってしまう。あくまでも「遊

び」とは、子どもの主体性や能動性に委ねられるべきものであり、強制されるものではないからである。また、子どもの自由・主体性と、安全の確保の両立も支援員を悩ませるジレンマの一つである。このようなジレンマの中で、「遊びには参加せずに見守る」というスタンスの支援員が存在しているのかもしれない。

言うまでもなく、児童館と児童クラブでは、来館する子どもの状況やニーズも異なる。児童館は「来たくて来る」子どもが多い傾向にあるが、児童クラブの場合は「本当は来たくないけれど親の就労等の事情で仕方なく来ている」という子どもも存在する。また、児童館の場合は、毎日来館する子どもも人数も異なるが、児童クラブの場合はレギュラーメンバーが定まっておりに共に通う時間も長い。つまり、児童館・児童クラブそれぞれの施設にやってくる子どもの特性によっても、子どもの「遊び」への温度感や子ども同士の関係性、子どもと支援員の関係性も異なる。このような状況において、「遊びの支援」という支援員の重要な専門性は、単に遊びの種類を多く習得するというだけに留まらないだろう。支援員は、子どもとともに遊びながら、所与の環境を再構成したり、その時の遊び仲間の特性に応じた遊び方が子どもの中から生まれやすくなる環境を作りつつ、それが子どもの中から自ずと生まれてこないときに、適切にリードするような「遊び仲間」としての役割が求められる。そのためには、今後、日常的な遊びの支援の中で生じた子どもに関する気づきや変化、さらには支援員自身の気づきや変化を、支援員自身が言語化し、言語化されたものを支援員同士共有したり考え合う場を持つことが、重要であるだろう。このような「遊び」を核にした事例の集積・検討は、児童館・児童クラブにおける支援を振り返る

重要な視点となり得る。なお、本調査は「遊びの理解と支援」をテーマとした研修会後に実施していることから、回答者の回答内容に研修会の内容のバイアスがかかっている可能性は否めない。今後の課題として、このようなバイアスがかからない状況において、対象地域を広げた調査の実施も検討したい。

参考文献

- 1) 厚生労働省編『改訂版放課後児童クラブ運営指針解説書』フレーベル館, 2021
- 2) 一般社団法人日本学童保育士協会編集『学童保育研究』かもがわ出版, 2021年12月
- 3) 愛知学童保育連絡協議会『あいちの学童保育情報ハンドブック2022年度版』（2023年3月発行）
- 4) 初見健一『子どもの遊び黄金時代 70年代の外遊び・家遊び・教室遊び』光文社新書, 2013